

巻 頭 言

多根総合病院 副院長 瓦 林 孝 彦

巻頭言の依頼を受けた。光栄なことである。民間の救急病院で独自の医学雑誌を刊行している病院は少ない。日常の診療に明け暮れて論文を読んだりする時間も乏しい中、症例報告を書いたり原著論文を作成するためにはかなりの労力を費やす。では何のために論文を作成する必要があるのか？以下私の経験をもとに考えてみたい。

私が卒業したのは1981年であるので、すでに40数年前の話である。当時はもちろんパソコンはなく、ようやくワープロが売り出された時代だった。日本語の論文は原稿用紙に書いて提出していた。そのような中で大動脈偽縮窄症という珍しい症例を経験したので、英文ワープロを使用して人生初の英語論文にチャレンジした。英語は簡単な上司の校閲だけでUSAの雑誌に投稿した。その結果は惨たんたるもので、考察はpoor 英語はextremely poor との不名誉なコメントをいただいた。この返事は医局の中でも有名になり、面白かった先輩が医局の掲示板に張り出す始末でおおいに盛り上がってしまった。研修医であるので仕方のないことなのだが、上司の先生のメンツをつぶしてしまったのは申し訳なかった。だがこの論文は半年後別の雑誌に掲載することができた。その後大学院に進み2編の英語論文を作成したが、過去の失敗から人脈を広げ相談できる医師を多くつくり、論文作成のノウハウや物の考え方まで自分なりのスタイルをつくることができ自信につながった。その後、民間の救急病院に循環器内科医として勤務した。当時はPTCAというバルーンによる冠動脈形成術が全国で広まっていく時代であり、そこに来た後輩に次々にPTCA関連の論文を書いてもらった。今では私の名前が載った論文はPubMed検索で40数編ある。うれしいことに当時教えた後輩が昨年大阪市立大学と和歌山県立医大の教授になった。

翻って「論文を書く意味は何か？」「書いてみなさい。そうすれば答えは自然と解る」。1つの論文を作成するためには、論理性、科学性などの基礎的な物の考え方が必要であるし、関連する論文も100編くらいは読んでおかなければならない。考察が最も重要であるが、その構成や展開は言語能力もおおいに駆使する必要がある。つまり、多くの困難を乗り越えて論文が完成する。その結果、他人の論文も批判的に読めるようになる。これらは一度経験すれば忘れないので、誰にも奪われることのない良い財産となる。

今回この多根総合病院医学雑誌に投稿された著者の皆さんは、これらの苦勞を乗り越えられた立派な人達だと思う。これからもこの経験を活かして後輩の育成にも力を注いで多根総合病院を活性化してもらいたい。